少年の日ノスタルジア　ショートストーリー

「紫におう　津志嶽と…」

手凧　春彦

紫におう津志嶽と
夕焼け雲が　呼んでいる
道を探して歩こう　我ら我ら
清い流れの応能校

母校である応能小学校が休校となってはや二十六年

おいらの知る限りでは、最後の卒業生三人（うち二人は双子の女の子）はそれぞれ子供を持つ親となって、うち二名はこの町内に住んどる。ほんでまた、そのうちのひとりはもう中二の子供を持つ母親となっとる。

子どもの頃は、校歌を誰が作ったものやら、どうやって作られたものやら考えにおよぶことも↘

なく、ただ、めんどくせーー！なんちゅうことを思いながらただひたすら大声で歌っていたものであった。

大人になって覚えた歌はすぐにメロディを忘れたり、歌詞を忘れたりするもんじゃが、小学校校歌となると脳みそに鉛筆で書き込んでおるんではないかと思うほど、くっきりと頭の中に刻み込まれている。

ある日、テレビを観ておったら…。
ちょうど休みの日だったのであろうか。
高校球児達の夢の舞台「甲子園」で高校野球の試合が中継されておった。

試合は終盤、劇的な幕切れで京都の「平安高校」という野球の名門校が勝ちをおさめた。↖

歓喜の波と喜びの涙、悔し涙の雨で水浸しのようになったスタンド。
そして、グランドでは、勝利校の校歌が流れる。

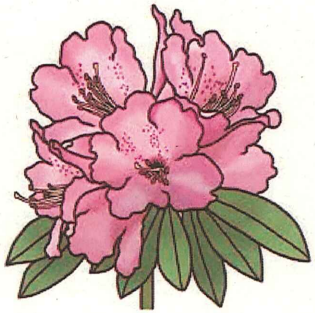
「紫におう…」

ありゃっ？どっかで聞いたような歌詞とやや似たような曲調（だったように思う…）
「これって…応能小学校歌みたいでないで！？」

全国でも、同じ作曲家作詞家が各地で校歌を作り提供しているとはなにかで聞いたことはあるけんども…

アメリカでは「精子バンク」というものがあり、女性がここから精子をもらって妊娠出産、育てるシステムがあるらしい。
つい先日、ドキュメンタリー番組で、同じ精子を提供された二人のアメリカ人女性から生まれた子どもら同士が対面するという異母父兄弟の感動的な出会いを放映しておった。

「あー、そういうたら、つるぎの山ん中と京の都の間でよう似たもん同士の校歌があったのう」
って、思い出したんでわ。

もう春じゃ。
昨年九月、国が定める「郷土の森」に指定されたちゅう津志嶽のシャクナゲ大群生地も、まもなく赤紫の花をい～っぱい咲かせはじめよる。

「紫におう　津志嶽と…」